

第4章 宇部（小串構内）医学部基幹整備に伴う試掘調査

1 調査の経過

当調査地区は小串構内の北西縁辺中央部に位置する。工事自体は特別高圧受変電にかかわる埋設管路工事で、医療技術短期大学部正門付近より学内外の境界周壁に沿って特別高圧受変電棟までの間、約170 mの距離で、幅0.85 m、深さ約1.6 mの掘削を伴うものである。この地域はこれまで埋蔵文化財の調査が実施されておらず、全く土層等の状況が把握されていないこと、また市道を挟んで対峙する位置にある体育館周辺で旧石器、中世の遺物が出土していることなどから、関係当局と協議の結果、土層の堆積状況を把握し、埋蔵文化財の有無の確認を主目的とした試掘調査を工事着工前において事前に行なうこととした。

調査は昭和59年5月22日から同年6月4日まで、路線予定地内の4カ所に試掘坑を設定して実施した。試掘坑設定にあたっては路線内に既設の埋設物が多数あるため、これらに影響がない地点を選定した。なお、調査は工事基底面レベルまで行ない、最終的に調査総面積は約28 m²に至った。

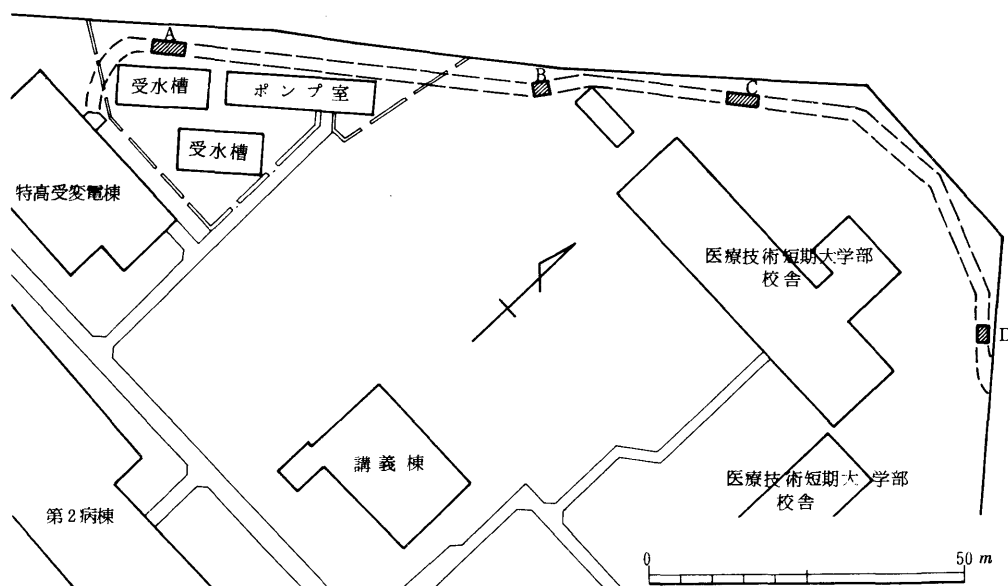


Fig. 10 調査区設定図

2 層位

Aトレンチ

特高受変電棟の裏にある受水槽と境界周壁との間に設定した5 m×2 mのトレンチである。地表面下上部は石炭殻を主とした近年の置土で、H=1.4 m前後に第2層：茶灰色土の旧耕作土がある。その直下の第3層：黄橙色粘質土は第2層に伴う床土で、以下粘土質の層が続き、そしてH=0.65 m前後で第8層：灰色粘土混り砂層上面となる。この第8層の堆積はボーリングステッキによる探査の結果、厚さ1 m以上あることを確認した。なお、この層以下は水を多量に含み湧水が激しいため掘削を断念したが、H=0 mの地点で貝殻を認めた。

Bトレンチ

医療技術短期大学部校舎の西側に位置する1.5 m×1.5 mのトレンチである。

土層上部には整地土・置土が約1.4 mと厚く存在し、その直下には厚さ15 cmを測る第2層：茶灰色土の旧耕作土があり、以下、A・Cトレンチ同様に第3・4層が続く。なお、第4層上面で小石を詰めた暗渠を確認した。

Cトレンチ

校舎の北側に位置する5 m×2 mのトレンチである。

層位は、地表面から50~60 cm下までは近年の置土で、その直下H=1.7~1.8 mに第2層の旧耕作土があり、以下Aトレンチと同様に第3~5層が堆積する。第5層直下には第7層：暗青灰色粘土層があり、Aトレンチの層序と異なる。しかしこの層はAトレンチの第6層：暗灰色粘質土層に対応すると推定され両者は若干の色調差とみられる。その下にAトレンチ同様水を多量に含む第8層がひろがり、H=0.8 mより下から多くの貝殻の出土をみた。

Dトレンチ

当地点は医療技術短期大学部校舎の正門に最も近いところに位置し、トレンチは1.5 m×1.5 mの規模である。

土層の上位は整地土・置土で、以下に旧耕作土とみられる第9層：灰色粘質土層があり、またそれに伴う床土と考えられる第10層：淡青灰橙色土層が続く。A~Cトレンチの層序を比べると土層の色調は異なるが、5⇔9、3⇔10、4⇔11、5⇔12とがそれぞれ対応すると推定する。なお、第2、9層は旧耕作土と記したが、第4、11層もその可能性がある。

第12層：青灰色粘土混り砂層上面で幅30 cmの暗渠を検出した。暗渠は東-西方向にのび、内部には小竹や葦等が入れてあり、また肩部には木杭が所々に打たれている。

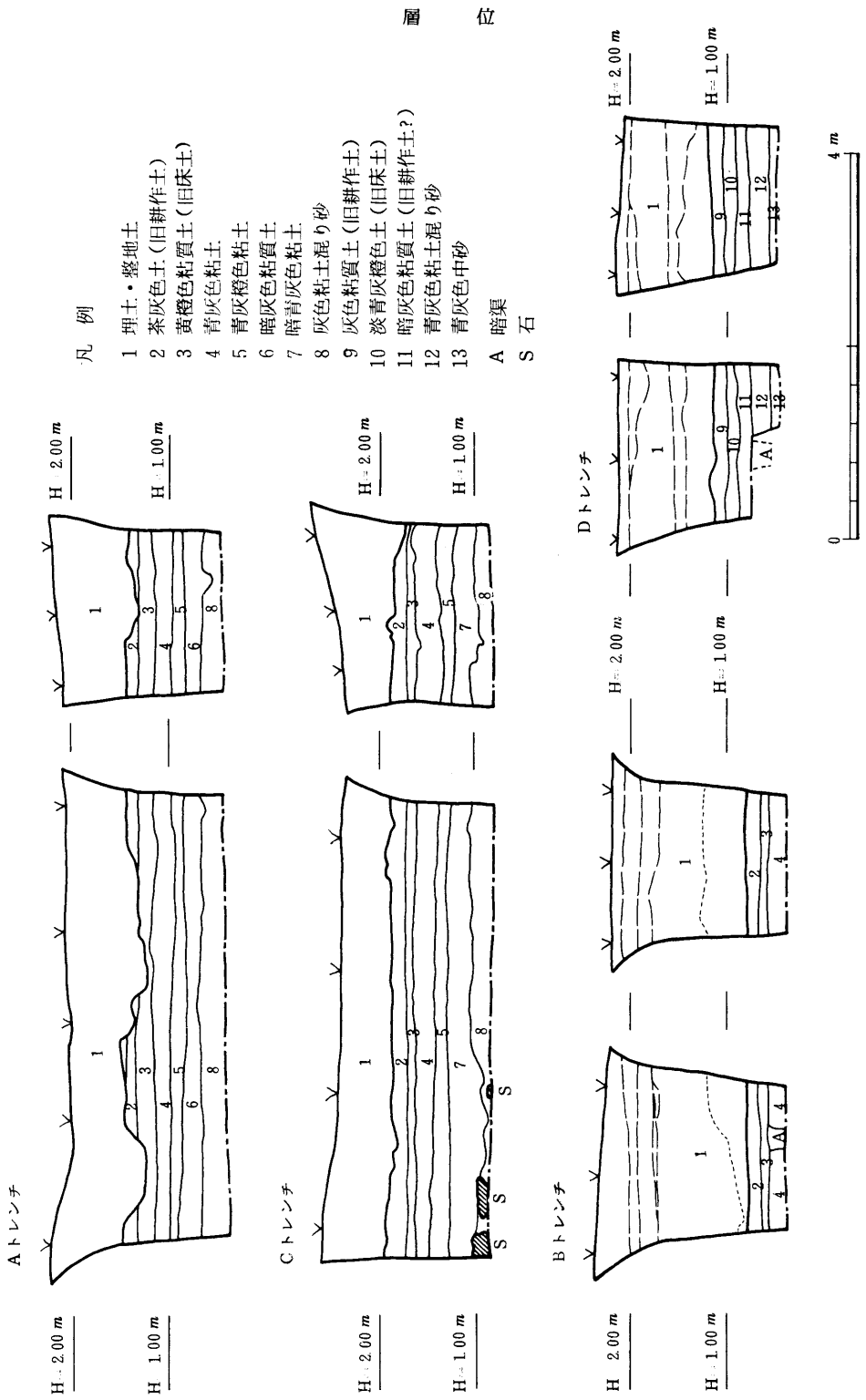


Fig. 11 土層断面図

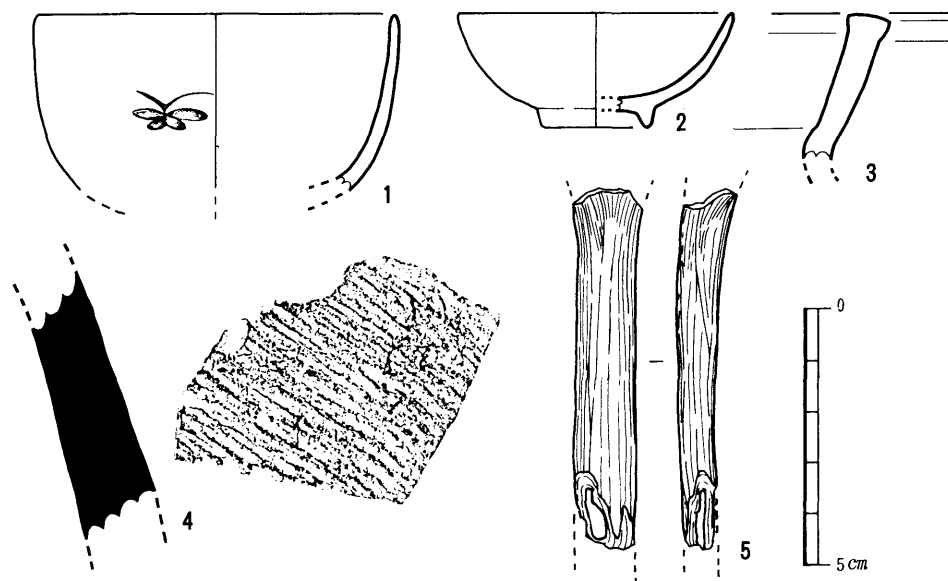


Fig. 12 出土遺物実測図

3 遺物

出土遺物にはAトレンチ第2層（旧耕作土）—土師質土器1点、Bトレンチ内第2層（旧耕作土）—土師質土器1点、磁器1点、瓦1点、焼土、Cトレンチ内第7層—須恵質土器1点、磁器2点、焼土、骨片2点、第8層—貝殻多数、Dトレンチ内第9層（旧耕作土）—磁器5点、陶器3点、瓦1点、焼土、第11層—土師質土器2点、瓦質土器1点、磁器2点、陶器1点、焼土がある。これらは近世以降のものが大半を占めるが、Cトレンチ出土の須恵質土器、Dトレンチ出土の土師質土器、瓦質土器などは中世まで遡る蓋然性が高く、とくに須恵質土器は古代の可能性もある。またCトレンチで多数出土した貝類も当地の地理的変遷過程より少なくとも近世以前のもと考えられる。以下、実測し得たものおよび貝殻について記する。

磁器 (Fig.12, 1・2) 1は湯呑みで、外面に青色の蝶の模様を施す。胎土は白色、釉調はやや淡青黄色を帯びた白色。2は猪口で、文様等はない。胎土、釉調とも白色。両者ともDトレンチ第9層出土。

土師質土器 (Fig.12, 3) 口縁部である。わずかに内傾気味に立ち上がり、端部は肥厚し丸くおさまる。調整は内面ヨコナデ、外面上位ナデ、外面下位ヨコナデ。色調は内外面と

遺 物

も淡灰白色。Dトレンチ第11層出土。なお小片で断定しかねるものの形状等により室町時代後半の羽釜である可能性を指摘しておく。

須恵質土器 (Fig. 12, 4) 大形の壺ないしは甕の胴部片で、外面に平行叩き目痕、内面ナデ調整痕が残る。色調は内面明青灰色、外面青灰色。胎土は精良で、焼成は堅緻である。Cトレンチ第7層出土。

骨片 (Fig. 12, 5) 現存長7.0 cm、最大幅1.6 cmを測る。種類等については今後専門の鑑定を待って期したい。

貝殻 (PL 6-②) Cトレンチ第8層出土。トレンチ内全域にわたり比較的濃密に散在していた。貝の種類および個体数は下記の表に示す通りである。種類は二枚貝が9種、巻

Tab. 2 生棲別貝類構成比表

貝種	名 称	最少 個体 数	右 殻数	左 殻数	瀬戸内海での様相				分 布 深 度
					垂 直 分 布	生 息 地	産 状	分 布 状 況	
二 枚 貝	ハマグリ	201	201	182	T ₃ -N ₁	砂 地	普 通	全 域	主として淡水の流入する鹹度の低い砂泥地に棲み、全国の内湾に分布。
	オキシジミ	28	22	28	T ₃ -N ₁	泥 地	多 い	全 域	浅海の泥底
	シオフキ	11	11	11	T ₃ -N ₁	砂 地	普 通	全 域	潮線下
	オノノガイ	12	8	12	T ₃ -N ₁	泥 地	多 い	全 域	潮線下
	アサリ	7	7	6	T ₃ -N ₁	砂地、泥地、礫地	多 い	全 域	主として淡水の流入する浅海の鹹度低い砂泥地に棲息
	カガミガイ	4	4	3	T ₃ -N ₁	砂 地	普 通	全 域	潮線下~5 fms.
	ハイガイ	5	5	0	T ₃ -N ₁	砂泥地	稀 (絶滅?)	平生港 大海湾	潮線下
	カリガネガイ	1	1	0	T ₂ -T ₃	岩礁地	少 ない	全 域	潮線下、主として内湾に棲息
	カキ	3			T ₃ -N ₁	岩礁地 砂礫地	多 い	全 域	潮線下
巻 貝	イボウミナ(?)	19			T ₁ -T ₂	砂泥地	少 ない	全 域	
	ウミナ(?)	4			T ₁ -T ₂	砂泥地	多 い	全 域	
	ヘナタリ(?)	4			T ₁ -T ₂	汽水性 砂泥地	普 通	全 域	潮線
	ツメタガイ	4			T ₃ -N ₁	砂泥地	普 通	全 域	
	ゴマフダマ	1			T ₃ -N ₁	砂泥地	普 通	全 域	5~10 fms.
	テングニシ	1			N ₁ -N ₂	砂泥地	普 通	全 域	15~30 fms.
	アカニシ	1			N ₁ -N ₂	砂泥地	普 通	全 域	10~20 fms.

※く T=潮間帯) T₀=潮上帯、T₁=高潮垂帯、T₂=中潮垂帯、T₃=低潮垂帯。

く N=浅海帯) N₁=上浅海帯20~30 mまで、N₂=中浅海帯50~60 mまで、

N₃=亜浅海帯100~120 mまで、N₄=下浅海帯200~250 mまで。

※垂直分布、生息地、産状、分布状況は「瀬戸内海の生物相I(軟体動物)」(広島大学理学部付属向島臨海実験所、1983年)、分布深度は「原色日本貝類図鑑」(吉良哲明、保育社、1983年)から引用した。

貝が7種で、個体数ではハマグリが全体の約3分の2を占め圧倒的に多い。垂直分布は低潮垂帯から上浅海帯(20~30mまで)のものが多く、巻貝では高・中潮垂帯や中浅海帯に及ぶものもある。生息地は砂泥地がほとんどである。なお、出土ハマグリを山口大学工業短期大学部池谷元同教授にESR年代測定して頂いたが、結果はマンガンの不純物が強すぎて測定不可能であったことを付記しておく。

4 小 結

今回の調査では顕著な遺構は検出されなかったが、土器類、貝類などが出土した。土器類は出土状況から昭和58年度に調査した体育館建設地域の出土遺物と同様、周辺地域からの流れ込みによるものと考えられる。ただし、貝類に関しては出土層やその数量および幼殻が含まれていることなどを勘案すると、二次的な堆積ではなく、この地がその棲息地であり、過去においてこの地が一時的にせよ海岸であった蓋然性が高いと思われる。また貝類の棲息時期は共伴土器がなかったため詳細な時期決定をし難いが、この地は少なくとも近世の段階で開作が行なわれていたと推定されることから、近世以降には下らないと察する。そのため今回の出土貝類はこの地の古環境を知る上では貴重な資料で、またその中には今日、瀬戸内海では稀産であるハイガイや、宇部周辺の海岸ではほとんど見られない大形のハマグリなどが含まれており、生物学的にも非常に興味深い点がある。以上のことよりこの地点は医学部構内の中でも、歴史、地理、生物などの各分野に関する貴重な資料が包蔵されており、今後の調査が期待される。(森田)

〔付記〕

貝の年代測定に関して池谷元同先生(山口大学工業短期大学部教授)、また貝類分類作業で杉原和恵氏(山口大学人文学部考古学研究室学生)の御協力を頂いた。記して感謝いたします。

付 記

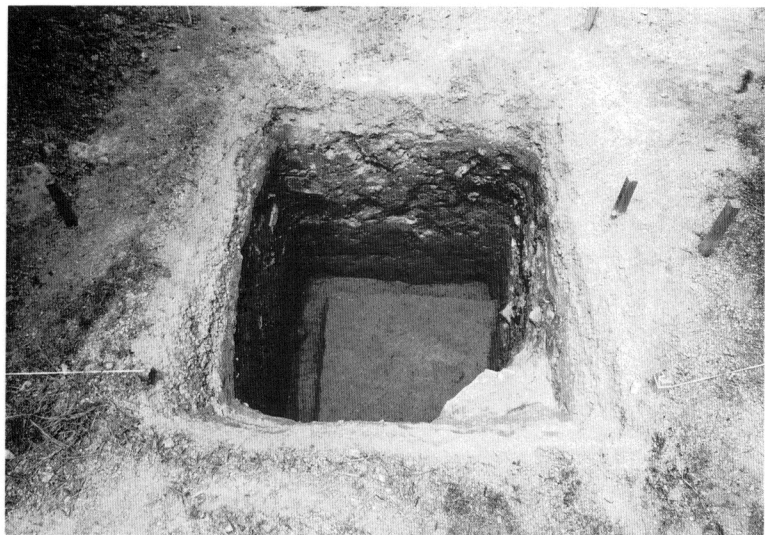
昭和59年11月1日、医学部構内、医療短期大学部正門の南に位置するガスガバナー庫付近において、都市ガス管布設工事に伴って宇部市教育委員会が埋蔵文化財の調査を実施しており、その結果を記する。

工事掘削範囲内に1.8×0.8mのトレンチを設定し発掘調査を行なった結果、地表面下約1.1~1.4mの間に青灰色粘土層があり、それ以下青灰色砂層が続くことを確認した。ただし地表面下約1.3m前後からの湧水が激しいため、青灰色砂層の厚さおよび以下については不明。遺構の検出、遺物の出土はなかった。

宇部（小串構内）医学部基幹整備に伴う試掘調査(1)



(1) Aトレンチ全景（南西から）



(2) Bトレンチ全景（南東から）



(3) Bトレンチ北壁土層断面（南西から）



(1) Cトレンチ全景（南西から）



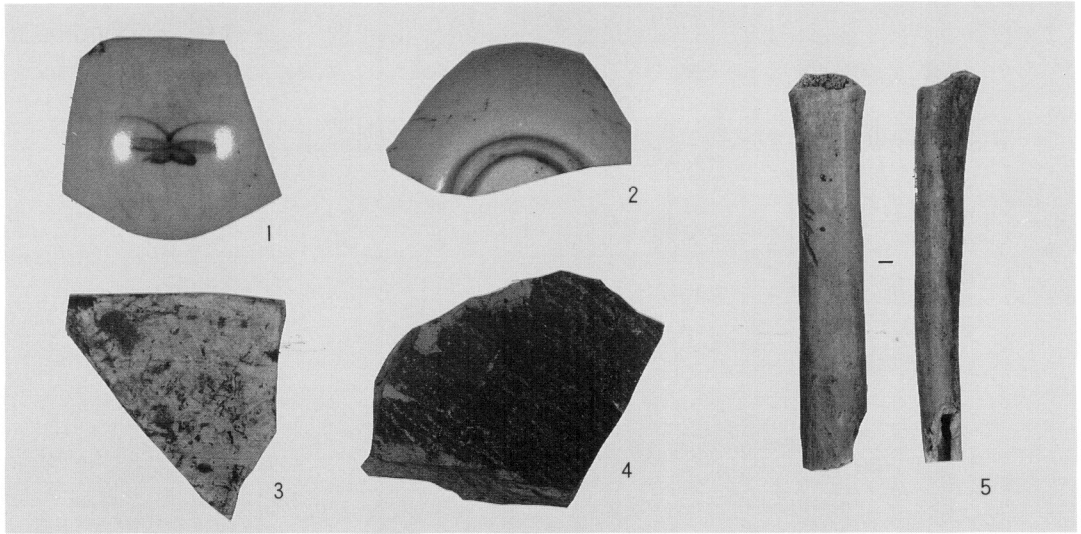
(2) Cトレンチ植物遺体出土状況（北東から）



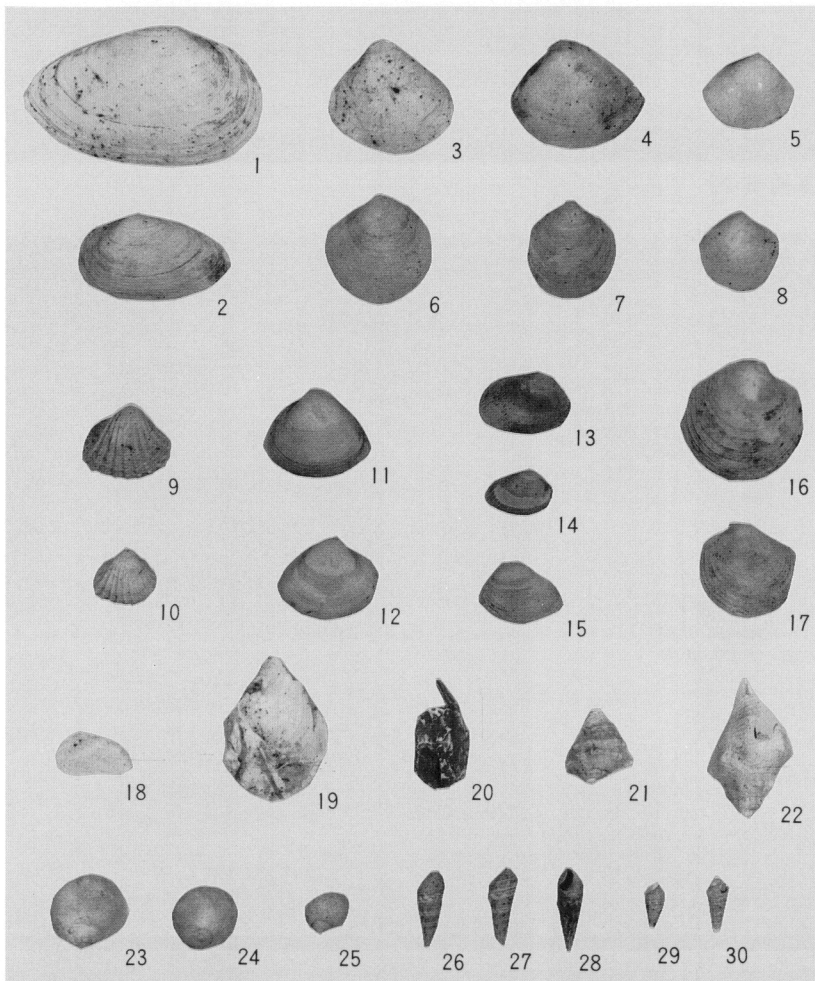
(3) Dトレンチ全景（南西から）

PL. 6

宇部(小串構内) 医学部基幹整備に伴う試掘調査(3)



(1) 出土遺物



- 1・2 オオノガイ
- 3～5 ハマグリ
- 6～8 オキシジミ
- 9・10 ハイガイ
- 11・12 シオフキ
- 13～15 アサリ
- 16・17 カガミガイ
- 18 カリガネエガイ
- 19・20 マガキ
- 21 アカニシ
- 22 テングニシ
- 23・24 ツメタガイ
- 25 ゴマフダマ
- 26～28 イボウミナ
- 29 ウミニナ
- 30 ヘタナリ

(2) 動物遺体(貝類)